

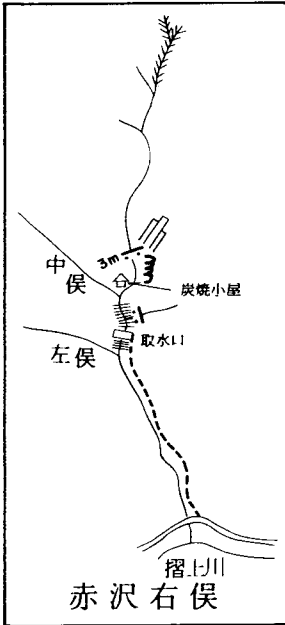
赤沢右俣

一九八三年七月三十一日

国道三九九号が赤沢を渡る手前から流水路にそって道がある。そこを二〇分程進んで赤沢に降りる。遊行を開始するとすぐに左俣との分岐となる。水量は一对四で右俣の方が多

い。断続的に続くナメを進み、取水口を乗りこえると中俣との分岐に出る。中俣は調査が済んでいるので、右俣に入る。

右俣に入るとすぐ右岸に炭焼き小屋がある。次に左岸に千枚岩状岩壁がそびえたつ。中



俣との出合からも見え、良い目印となる。さして変化もない沢だが、この岩場だけは迫力がある。

ガレ場の中にある三戸の滝を越すと、沢床は泥状となる。少し進むとカレ沢となり、二俣に分かれる。右に入ると、やがてルンゼが現れ

温帯の代表的な樹木⑥

ケヤキ(ニレ科)

ケヤキもブナと同じく落葉広葉樹を代表する高木である。福島県の木にもなっており、街路樹や庭園に多く植栽されているが、樹林の中に自然の姿で自生しているのを見ることは少ない。

▼ケヤキはまた、春の若芽から秋の紅葉まで、四季を通じて我々を楽しませてくれる。▼材は良質で、昔より多用され神社・仏閣などには総ケヤキ造りのものが多く、何百年の風雪に耐えて、今なお多く残っている。現在では、ケヤキ材は高価で、一般庶民には手が出ないものとなった。

(大西)

る。右のルンゼに入り、途中から左岸に登って稜線に出る。稜線には踏跡があり、果樹園まで続いていた。

(記)

「タイム」 赤沢右俣出合(九:四〇)

↓終了(一〇:三五)

高山沢

L#

一九八二年八月二九日

天気快晴。出合の堰堤上流は、堆石で埋まっており、水は伏流となっている。ほどなく水流も現れ、F1六段となる。これは右側を直登する。

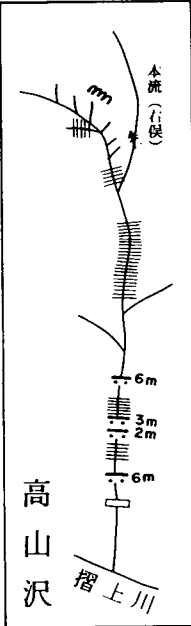
上流はナメ床が断続的に続き、段々を所々にミックスしている。ナメ

のナメ滝に着く。左右どちらでも登れる。仕事道らしい、荒れた踏跡が所々に見えている。

八時五〇分、二俣に着く。右俣が本流で、そっちに入る予定だったが、判断がまずくて左俣をつめてしまう。

とナメの間に小さな落差の滝、F2、F3を落し、この沢の核心部である。

やがてF4六段



背丈ほどのカヤのヤブを沢ぞいにつめ、灌木帯を抜ける。九時五〇分、六九六段ピークと六七〇・三三三ピークの間のコルに到着。一息いれて手綱沢への下降に移る。

(記)

「タイム」 高山沢出合堰堤(七:二〇)

↓二俣(八:五〇) ↓コル(九:五〇)

